

きゅうり

—— 発病・加害時期
 === 発病・加害最盛期

作型・病害虫名	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普通				トンネル被覆 ●▲ は種定植			●▲ 収穫					
べと病・立枯性疫病 灰色かび病 うどかんこ病 炭疽病 褐斑病 つる枯割病 つる割病 斑點細菌病 黄化えそ病 モザイク病 ミカンキイロアザミウマ ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類 アブラムシ類 ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ) ハモグリバエ類 ハダニ類 ネコブセンチュウ												
ハウス抑制							●▲ 接木					
べと病・立枯性疫病 灰色かび病 うどかんこ病 菌核病 炭疽病 褐斑病 斑點細菌病 黄化えそ病 モザイク病 ミカンキイロアザミウマ ミナミキイロアザミウマ コナジラミ類 アブラムシ類 ウリノメイガ(ワタヘリクロノメイガ) ハモグリバエ類 ハダニ類 ネコブセンチュウ												

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

べと病

留意事項

- 1 気温20～24℃で発生が多い。
- 2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 予防散布が大切である。
- 4 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZはかぶれに注意する。
- 5 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤、リドミルゴールドMZの成分マンゼブの総使用回数は、3回以内。
- 6 プロポーズ顆粒水和剤、ベトファイター顆粒水和剤の成分ベンチアバリカルブイソプロピルの総使用回数は、3回以内。
- 7 アミスター20フロアブルは、薬害の恐れがあるため、浸透性を高める展着剤を使用しない。
- 8 QoI剤《1 1》は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 密植を避け、通風・透光を良くする。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 3 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 窒素過多・肥料切れにならないように、肥培管理に注意する。
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) <M3> 【600～800倍 前日／3回】
 - ・ [ランマンフロアブル](#) <2 1> 【1000～2000倍 前日／4回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <M5> <4 0> 【1000～1500倍 前日／3回】
 - ・ [ベトファイター顆粒水和剤](#) <2 7> <4 0> 【2000～3000倍 前日／3回】
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) 《1 1》 【1500～2000倍 前日／4回】
 - ・ [リドミルゴールドMZ](#) <M3> <4> 【1000倍 前日／3回】
- 7 施設内では、くん煙剤も有効である。(Ⅷ省力安全防除 1くん煙 (1) 参照)

疫病・立枯性疫病

留意事項

- 1 比較的高温（気温25℃前後）で降雨後などの多湿条件下で発生が多い。
- 2 施設栽培きゅうりでは立枯症状となることが多い。
- 3 かぼちやに接ぎ木すると被害を軽減できる。
- 4 ジマンダイセン水和剤は、かぶれに注意する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 床土は、新しいものを使う。
- 2 肥効切れしないように、肥培管理に注意する。
- 3 栽培期間中過湿にならないように、かん水や排水に注意する。
- 4 雨水などの、はね上がり防止のために、わらやポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 苗床、本ぽを太陽熱消毒する。(XⅢ土壤消毒 1太陽熱利用による土壤消毒(太陽熱消毒) 参照)
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を土壤かん注する。
 - ・ [プレビクールN液剤](#) <28>
 - 【立枯性疫病 400倍 3L/m² 苗床：は種直後、本ぽ：定植直後及び生育初期(収穫21日前) / 3回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を発病初期に葉裏、地ぎわ部に十分かかるように散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#) <M3> 【疫病 600倍 前日 / 3回】

苗立枯病

留意事項

- 1 病原菌は、リゾクトニア菌、ピシウム菌などである。
- 2 タチガレン液剤は、ピシウム菌、フザリウム菌に有効である。
- 3 モンカットフロアブル40は、リゾクトニア菌に有効である。
- 4 SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 床土は毎年更新する。
- 2 苗床にほ場から採取した土を使用する場合は、土壤消毒する。(XⅢ土壤消毒 2土壤

病害虫等を対象とした薬剤による土壤消毒(4) 参照)

- 3 未熟な堆肥は発病を助長するので、完熟堆肥を施用する。
- 4 土壤が過湿にならないように、かん水量に注意する。
- 5 被害株は早期に除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 6 は種前の種子に、下記の薬剤を粉衣または浸漬する。
 - ・ [オーソサイド水和剤80](#) <M4> 【種子重量の0.2~0.4%粉衣 は種前 / 1回】
 - ・ [ベンレートT水和剤20](#) <M3> <1>
 - 【乾燥種子重量の0.4%粉衣 は種前 / 1回】または
 - 【20倍 30分間浸漬 は種前 / 1回】
- 7 は種直後に、下記の薬剤を3L/m²土壤かん注する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [タチガレン液剤](#) <32>
【ピシウム菌、フザリウム菌 500～1000倍 は種直後／3回】
 - ・ [モンカットフロアブル40](#) <<7>>
【リゾクトニア菌 1000～2000倍 は種時～子葉展開時／1回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を2L／㎡の割合でかん注する。
- ・ [オーソサイド水和剤80](#) <M4> 【800倍 は種後（2～3葉期）／5回】

灰色かび病

留意事項

- 1 施設内が低温（20℃くらい）で多湿の時、発生が多い。
- 2 予防的に散布する。
- 3 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 施設内の換気や排水を良好にし、過湿にならないように注意する。
- 2 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 3 咲き終わった花卉や被害葉・被害果を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【2000～4000倍 前日／7回】
 - ・ [フルピカフロアブル](#) <9> 【2000～3000倍 前日／4回】
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) <12> 【1000～1500倍 前日／3回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [トップジンM水和剤](#) <1> 【1500～2000倍 前日／5回】
 - ・ [ロブラール水和剤](#) <2> 【1000～1500倍 前日／4回】
 - ・ [ケンジャフロアブル](#) <<7>> 【1000～1500倍 前日／4回】
- 6 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

うどんこ病

留意事項

- 1 施設栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- 2 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。
- 3 ブルームレス台木では、うどんこ病が発生しやすい。
- 4 葉裏から発生するうどんこ病もあるので注意して観察し、発生初期の防除に努める。
- 5 施設内では高温に伴う薬害を生じやすいので、換気を十分に行ってから薬剤を散布する。
- 6 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

を行う。

7 SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 施設内の換気を良好にする。
- 2 被害葉は早めに除去し、通風を良くする。
- 3 抵抗性品種を用いる。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【2000～4000倍 前日/7回】
 - ・ [フルピカフロアブル](#) <9> 【2000～3000倍 前日/4回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <40> <M5> 【1000倍 前日/3回】
 - ・ [アフェットフロアブル](#) <<7>> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [パレード20フロアブル](#) <<7>> 【2000～4000倍 前日/3回】
 - ・ [トリフミン水和剤](#) <3> 【3000～5000倍 前日/5回】
 - ・ [カリグリーン](#) <NC>
 - 【野菜類（除トマト、ミニトマト） 800～1000倍 前日/—】
- 6 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

菌核病

留意事項

- 1 施設栽培で多湿時に発生が多い。
- 2 QoI剤<<11>>、SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 被害株は、菌核形成前にほ場外に持ち出し処分する。
- 2 ポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 3 肥効切れしないように肥培管理に注意する。
- 4 栽培終了後は、水をためて土中の菌核を腐らせる。水をためることができない場合は、太陽熱消毒を行う。（ⅩⅢ土壤消毒 1太陽熱利用による土壤消毒（太陽熱消毒）参照）
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [セイビアーフロアブル20](#) <12> 【1000～1500倍 前日/3回】
- 6 下記の薬剤を、発病初期から地表面にも十分散布する。
 - ・ [トップジンM水和剤](#) <1> 【1500～2000倍 前日/5回】
 - ・ [パレード20フロアブル](#) <<7>> 【2000～4000倍 前日/3回】
 - ・ [ロブラール水和剤](#) <2> 【1000倍 前日/4回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [スクレアフロアブル](#) ≪ 1 1 ≫ 【2000倍 前日／3回】

炭疽病（たんそびょう）

留意事項

- 1 気温22～24℃で多湿のときに発病しやすく、降雨により飛散する。
- 2 予防散布が大切である。
- 3 QoI剤≪ 1 1 ≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 4 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は、3回以内。
- 5 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤はかぶれに注意する。
- 6 アミスター20フロアブルは、薬害の恐れがあるため、浸透性を高める展着剤を使用しない。

防除方法

- 1 連作を避ける。
- 2 排水を良好にする。
- 3 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングする。
- 4 窒素質肥料の過用を避ける。
- 5 古い葉や、巻きひげが発生源になるので除去する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) <M3> 【600倍 前日／3回】
 - ・ [ダコニール1000](#) <M5> 【1000倍 前日／12回】
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【2000～4000倍 前日／7回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アミスター20フロアブル](#) ≪ 1 1 ≫ 【2000倍 前日／4回】
 - ・ [トップジンM水和剤](#) <1> 【1500～2000倍 前日／5回】

褐斑病

留意事項

- 1 高温、多湿の施設栽培で発生が多い。
- 2 病原菌は土壌中に残るか、農業用資材に付着して越年し、伝染源となる。
- 3 種子伝染する。
- 4 予防散布が大切である。
- 5 台風襲来後に多発しやすい。
- 6 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は、3回以内。
- 7 ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤はかぶれに注意する。
- 8 SDHI剤≪ 7 ≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 1 前年の発生が多かった場合は、定植前に支柱等の消毒を行う。(XIV農業用資材の消毒 参照)
- 2 施設内の換気を良好にし、過湿にならないよう注意する。
- 3 天井フィルムからの結露水のポタ落ちで発病が助長される。
- 4 窒素過多、肥効切れにならないよう適正な肥培管理に努める。
- 5 被害葉・老化葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) <M3> 【600倍 前日/3回】
 - ・ [ベルコート水和剤](#) <M7> 【2000倍 前日/7回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) <M5> <40> 【1000倍 前日/3回】
 - ・ [パレード20フロアブル](#) <<7>> 【2000~4000倍 前日/3回】
 - ・ [カンタスドライフロアブル](#) <<7>> 【1500倍 前日/3回】

つる枯病

留意事項

- 1 高温多湿時に発生が多い。
- 2 SDHI剤<<7>>は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 連作を避ける。
- 2 支柱などの資材をケミクロンGなどで消毒する。(XIV農業用資材の消毒 参照)
- 3 株元を高くし、株元のかん水を避け、地ぎわ部を乾燥させる。
- 4 排水を良好にする。
- 5 施設栽培では換気を良好にする。
- 6 被害株はまきひげも残さず早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [パレード20フロアブル](#) <<7>> 【2000~4000倍 前日/3回】
 - ・ [トリフミン水和剤](#) <3> 【3000倍 前日/5回】
 - ・ [ロブラール水和剤](#) <2> 【1000倍 前日/4回】
- 8 下記の薬剤を発病初期に、罹病部をていねいに削り取って塗布する。
 - ・ [トップジンMペースト](#) <1> 【原液 発病初期/5回】

つる割病

留意事項

- 1 地温20℃以上で発生する。
- 2 接木栽培では、穂木の自根発生に注意し、台木（かぼちゃ）の子葉は活着後早めに摘み取る。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 発病地では数年間作付けしない。
- 2 植え傷みを少なくする。
- 3 排水を良好にする。
- 4 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 抵抗性台木を用いる。
- 6 苗床、本ぽを土壤消毒する。(XⅢ土壤消毒 参照)
- 7 下記薬剤を施用する。
 - ・ [ベンレート水和剤](#) <1> 【1000倍 土壤かん注 定植前～定植1か月後／3回】

斑点細菌病

留意事項

- 1 種子、被害茎葉が伝染源で、菌の発育適温は25～27℃で低温でも繁殖する。
- 2 カスミンボルドー、銅シン水和剤は、薬害の恐れがあるため、幼苗期や高温時の散布、連続散布を避ける。
- 3 カスミンボルドー、銅シン水和剤の成分カスガマイシンの総使用回数は、5回以内。

防除方法

- 1 ウリ科の連作を避ける。
- 2 支柱などの資材をケミクロンGなどで消毒する。(XⅣ農業用資材の消毒 参照)
- 3 排水を良好にし、過湿にならないようにする。
- 4 病原菌のはね上がり防止のために、わらやポリフィルムでマルチングを行う。
- 5 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ジーファイン水和剤](#) <NC> <M1> 【750～1500倍 前日／—】
 - ・ [ヨネポン水和剤](#) <M1> 【500倍 前日／4回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [カスミンボルドー](#)、[銅シン水和剤](#) <M1> <24> 【1000倍 前日／5回】

黄化えそ病

留意事項

- 1 本病の原因ウイルスはメロン黄化えそウイルス (MYSV) である。
- 2 ミナミキイロアザミウマ (1齢または2齢幼虫) がメロン黄化えそウイルス (MYSV) に感染した植物を吸汁することで保毒し永続伝搬する。経卵伝染はしない。また、種子や土壌からは伝染しない。
- 3 汁液伝染性は低いため、管理作業 (ハサミによる摘心など) による汁液付着では伝染する可能性は低い。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 4 生育初期の感染による被害が大きい。

防除方法

- 1 本病の原因ウイルスを伝搬するミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。(ミナミキイロアザミウマの項 参照)
- 2 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。(速やかに抜き取るか地際で切断し、ビニール袋に入れ密封するなどして完全に枯死させてから処分する。)
- 3 アザミウマ類の生息場所となるほか、メロン黄化えそウイルス (MYSV) の感染源になるため、施設内や周辺の除草を行う。

退緑黄化病

留意事項

- 1 本病の原因ウイルスは、ウリ類退緑黄化ウイルス (CCYV) である。
- 2 黄化えそ病との明確な区別は、目視では困難である。本病の媒介昆虫のタバココナジラミと合わせて、黄化えそ病の媒介昆虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- 3 経卵伝染、汁液伝染、種子伝染および土壌伝染はしない。

防除方法

- 1 ウリ類退緑黄化ウイルス (CCYV) を伝搬するタバココナジラミの防除を徹底する。(コナジラミ類の項 参照)
- 2 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。(速やかに抜き取るか地際で切断し、ビニール袋に入れ密封するなどして完全に枯死させてから処分する。)
- 3 タバココナジラミの生息場所となるため、施設内や周辺の除草を行う。

モザイク病

留意事項

- 1 本病の主な原因ウイルスはキュウリモザイクウイルス (CMV)、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV) である。
- 2 生育初期の感染による被害が大きい。
- 3 管理作業 (ハサミによる摘心など) による汁液付着でも伝染する。
- 4 施設栽培では、かぼちゃ台木の接ぎ木栽培でズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV) 等に単独または重複感染すると萎れ症状を起こすことがある。

防除方法

- 1 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 2 苗床は寒冷しゃで被覆し、有翅アブラムシ類の侵入を防ぐ。
- 3 シルバーポリフィルムでマルチングを行い、有翅アブラムシ類の侵入回避を徹底する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 4 施設の開口部には、寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）などを張り、有翅アブラムシ類の侵入を防ぐ。（アブラムシ類の項 参照）
- 5 発病株への接触によりウイルスが伝搬する可能性が高いので、発病が疑われる株の作業は後回しにする。

ミカンキイロアザミウマ

留意事項

- 1 露地でも越冬が可能である。
- 2 成虫は花によく集まる習性がある。
- 3 「キルパー」は、「適用病害虫（設定なし）」で、使用目的として、「前作の野菜類または花き類・観葉植物」の「アザミウマ類まん延防止」とした登録がある。使用方法は、「所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布またはかん水する」。（きゅうりの病害虫まん延防止目的でかん水処理する場合は、被覆はあらかじめ除去して行い、処理中施設は3日間密閉する。）

防除方法

- 1 施設の開口部には、寒冷しゃ（目合い0.4mm以下の白色ネットまたは0.8mm以下の赤色ネット）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 2 ビニル等でマルチングを行い、土中で蛹化するのを防ぐ。
- 3 施設内や周辺の除草を行う。
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [プリロツソ粒剤オメガ](#) <28>
【アザミウマ類 2g/株 株元散布 育苗期後半～定植時/1回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) <23>
【アザミウマ類 500倍（50ml/株） 株元かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 劇 <4A> 【アザミウマ類 2000～4000倍 前日/3回】
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【アザミウマ類 2000倍 前日/2回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <30> 【アザミウマ類 2000倍 前日/2回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【アザミウマ類 2500～5000倍 前日/2回】
- 6 前作の栽培終了後から残さ撤去までに、アザミウマ類のまん延防止を目的として下記の薬剤を使用する。
 - ・ [キルパー](#) <8F>
【適用病害虫（設定なし） 原液として60L/10a 前作の栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）/1回】

ミナミキイロアザミウマ

留意事項

- 注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
- 注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 1 施設内では年中発生する。
- 2 主に葉に寄生する。
- 3 ミナミキイロアザミウマはきゅうりに被害（モザイク症状・えそ斑、生育抑制、枯死等）を及ぼす「キュウリ黄化えそ病」の原因ウイルス（MYSV）を媒介する。
- 4 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
- 5 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。
- 6 プリロッソ粒剤、アベイル粒剤の成分シアントラニリプロールの総使用回数は4回以内（定植時までの処理及び定植直後の株元かん注は合計1回以内、定植後の散布は3回以内）
- 7 「キルパー」には、「適用病害虫（設定なし）」で使用目的として、「前作の野菜類または花き類・観葉植物」の「アザミウマ類まん延防止」とした登録がある。
※使い方等詳細は、「ミカンキイロアザミウマ」を参照。

防除方法

- 1 ほ場周辺（特に育苗ほ周辺）の除草を行う。栽培期間の前後を含めて、ほ場内及び周辺の除草を徹底する。（X V 除草剤 参照）
- 2 前作終了後または、定植前の高温期に施設内をたん水し、密閉して蒸し込む。
- 3 育苗は専用の施設で行う。苗床は寒冷しゃで被覆し、侵入を防ぐ。
- 4 施設の開口部には、寒冷しゃ（目合い0.4mm以下の白色ネットまたは0.8mm以下の赤色ネット）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 5 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 6 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根する。施設内を除草した後、施設を2週間以上密閉して死滅させる。発生ほ場の収穫残さは、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 7 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) < 4 A >
【アザミウマ類 2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 - ・ [アベイル粒剤](#) < 2 8 > < 4 A >
【アザミウマ類 2g/株 株元散布 育苗期後半～定植当日/1回】
 - ・ [プリロッソ粒剤オメガ](#) < 2 8 >
【アザミウマ類 2g/株 株元散布 育苗期後半～定植時/1回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) < 2 3 >
【アザミウマ類 500倍（50ml/株） 株元かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モスピラン顆粒水溶剤](#) 劇 < 4 A > 【アザミウマ類 2000～4000倍 前日/3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [アファーム乳剤](#) <6> 【アザミウマ類 2000倍 前日/2回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <30> 【アザミウマ類 2000倍 前日/2回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【アザミウマ類 2500~5000倍 前日/2回】
- 9 施設内では天敵を利用する方法（放飼）もある。
- ・ [スワルスキー](#) <-(生)>
 - 【野菜類（施設栽培） アザミウマ類 250~500ml（約25000~50000頭）/10a 発生直前~発生初期/-】
- 10 前作の栽培終了後から残さ撤去までに、アザミウマ類のまん延防止を目的として下記の薬剤を使用する。
- ・ [キルパー](#) <8F>
 - 【適用病害虫（設定なし） 原液として60L/10a 前作の栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）/1回】
- 11 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

コナジラミ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 2 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
- 3 多発すると、すす病が発生する。
- 4 タバココナジラミはきゅうりに被害（退緑小斑点の増加、癒合による黄化、草勢低下、収量減少等）を及ぼす「キュウリ退緑黄化病」の原因ウイルス（CCYV）を媒介する。
- 5 退緑黄化病は、タバココナジラミが低密度でも発生する。
- 6 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計3回以内）。
- 7 「キルパー」は、「適用病害虫（設定なし）」で、使用目的として、①「前作のきゅうりのコナジラミ類まん延防止」または②「前作のトマトまたはミニトマトのコナジラミ類まん延防止」とした登録がある。使用方法は、いずれも「予め被覆した内で、所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布またはかん水する」。（きゅうりの病害虫まん延防止目的でかん水処理する場合は、被覆はあらかじめ除去して行い、処理中施設は3日間密閉する。）

防除方法

- 1 施設内や周辺の雑草を除去する。
- 2 施設では、開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.4mm以下）を張り、侵入を防止する。ただし、高温期に目合い0.8mm以下のネット被覆は作物に高温障害が生じるお

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

それがあるので注意する。

- 3 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根する。施設内を除草した後、施設を2週間以上密閉して死滅させる。発生ほ場の収穫残さは、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ **ダントツ粒剤** <4 A>
【1~2g/株 株元処理 育苗期後半/1回】または
【1~2g/株 植穴処理土壌混和 定植時/1回】
 - ・ **モベントフロアブル** <2 3>
【500倍 (25~50ml/株) 株元かん注 育苗期後半~定植当日/1回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ **アフーム乳剤** <6> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ **アグリメック 劇** <6> 【500~1000倍 前日/2回】
 - ・ **グレーシア乳剤** <3 0> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ **ベストガード水溶剤** <4 A> 【1000~2000倍 前日/3回】
- 6 施設内では天敵を利用する方法（放飼）もある。
 - ・ **スワルスキー** <-(生)>
【野菜類（施設栽培） 250~500ml（約25000~50000頭）/10a
発生直前~発生初期/-】
- 7 前作の栽培終了後から残さ撤去までに、コナジラミ類のまん延防止を目的として下記の薬剤を使用する。
 - ・ **キルパー** <8 F>
【適用病虫害（設定なし） 前作がきゅうりの場合、原液として60L/10a、前作がトマトまたはミニトマトの場合、原液として40~60L/10a 前作の栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）/1回】
- 8 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

アブラムシ類

留意事項

- 1 ワタアブラムシは、キュウリモザイクウイルス（CMV）、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）、CABYVなどを媒介する。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 葉裏に十分に散布する。
- 4 スタークル粒剤、スタークル顆粒水溶剤、アルバリン粒剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 2 施設では、開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、侵入を防止する。
- 3 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A>
 【1g/株 株元散布 育苗期/1回】または
 【1~2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
 【1g/株 株元散布 生育期（収穫開始14日）/1回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) <2 3>
 【500倍（25~50ml/株） 株元かん注 育苗期後半~定植当日/1回】
- 4 発生初期に、下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) <4 A>
 【2000~3000倍 前日/2回】
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) <9 B> 【4000倍 前日/3回】
 - ・ [トランスフォームフロアブル](#) <4 C> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ベネビアOD](#) <2 8> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [ウララDF](#) <2 9> 【2000~4000倍 前日/3回】
- 5 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除 1くん煙（1） 参照）

ウリノメイガ（ワタヘリクロノメイガ）

留意事項

- 1 中・老齢幼虫は葉をつづり合わせ、その中で葉を食害するので、防除は困難である。
 早期発見・早期防除を心がける。

防除方法

- 1 発生初期に、下記の薬剤を葉の裏にまでよくかかるように散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <3 0> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ベネビアOD](#) <2 8> 【2000倍 前日/3回】
 - ・ [BT剤](#) <1 1 A>（Ⅸ野菜類の病害虫 3野菜類 参照）

ハモグリバエ類

留意事項

- 1 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。

防除方法

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 1 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 2 育苗期の防除を徹底し、本ぼに被害苗を持ち込まない。
- 3 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 4 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 育苗期または定植時に、下記の薬剤を施用する。
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) <4 A>
【2g/株 株元散布 育苗期/1回】または
【2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アフーム乳剤](#) <6> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [グレーシア乳剤](#) <30> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ディアナSC](#) <5> 【2500~5000倍 前日/2回】
 - ・ [ベネビアOD](#) <28> 【2000倍 前日/3回】

ハダニ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 施設内や周辺の除草を行う。
- 2 下記の薬剤をかん注処理する。
 - ・ [モベントフロアブル](#) <23>
【500倍（50ml/株） 株元かん注 育苗期後半~定植当日/1回】
- 3 発生初期から下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スターマイトフロアブル](#) <25 A> 【2000倍 前日/1回】
 - ・ [マイトコーネフロアブル](#) <20 D> 【1000倍 前日/1回】
 - ・ [カネマイトフロアブル](#) <20 B> 【1000~1500倍 前日/1回】
 - ・ [コロマイト水和剤](#) <6> 【2000倍 前日/2回】
 - ・ [ダブルフェースフロアブル](#) <25 B> <21 A> 【2000倍 前日/1回】
- 4 施設内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除 くん煙1（1）参照）

ネコブセンチュウ

防除方法

- 1 夏期にたん水して、生息密度を低くする。
- 2 苗床、本ぼを土壌消毒する。（ⅩⅢ土壌消毒 参照）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

3 下記の薬剤を施用する。

- ・ バイデートL粒剤 劇 < 1 A >

【25～50kg／10a 全面土壌混和 は種前または定植前／1回】

- ・ ネマキック粒剤 < 1 B >

【15～20kg／10a 全面土壌混和 定植前／1回】

- ・ ネマトリンエース粒剤 < 1 B >

【15～20kg／10a 全面土壌混和 は種前または定植前／1回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。